

高齢化社会とボランティア活動 —National Trust のボランティアプログラムから学ぶ—

コース 国際文化コース
学籍番号 140057
氏名 市橋 若菜
指導教員 加藤 千博

現在の日本の高齢化は深刻なものである。2015年10月1日の時点で日本総人口のうち4人に1人が65歳以上の高齢者であり、2035年には3人に1人が高齢者となると推測されている。一方高齢者に対して若者の数が少なくなっており、若者一人が負う負担が大きくなっていく。それだけではなく年金問題や介護人材不足についての問題など高齢化が引き起こす問題は深刻であるといえる。高齢化を抑制するために高齢者が元気に過ごすことができる期間、健康寿命を延ばすことが今後の課題であると考えられる。

本論文では、高齢者が退職後も元気に過ごしていくためのひとつの方法として、高齢者のボランティア活動の重要性を提示した。そしてボランティア活動の成功例としてイギリス最大の環境ボランティア団体である、National Trust のボランティアプログラムを学ぶ事を本論文の主題とした。National Trust について研究することで得られた結果を基に、イギリス、そしてアメリカのボランティア活動に対するプログラムが日本で高齢者のボランティア活動をより発展させるためのモデルとなるかどうかを検討した。

本論ではまずボランティアの定義付けを行い、高齢者ボランティアの重要性を提示した。そして National Trust の成立背景、法律、さらにボランティアプログラムから日本の高齢者のボランティア活動のモデルとなるかどうかを検討した。また世界で最もボランティア活動が行われている国のひとつであるアメリカのボランティア教育を研究し、アメリカで行われているボランティアに対する教育を日本に取り入れることができるかどうかを検討し、イギリス、アメリカのボランティアに対する考え方は日本のモデルとなるかどうかについて明らかにした。

第一章において高齢者がボランティア活動を行うことで得られる身体的、精神的メリットを論じた。その結果、外出頻度を増加させ、他者と頻繁にコミュニケーションを取ることができるボランティア活動は高齢者にとって身体的、精神的に好影響であるということが明らかになった。そして高齢者自身だけでなく、社会自体にとっても高齢者ボランティアは有益であるということも示した。

第二章では、本論文の主題である、National Trust のボランティアプログラムについて論じた。National Trust の成立背景、法律、活動理念から日本が高齢者のボランティア活動を発展させるために National Trust をモデルとすることができるかどうかを検討した。National Trust のボランティアプログラムは歴史的に徐々に改善されていったものである。

そのため **National Trust** のボランティアプログラムをそのまま日本のボランティア政策に取り入れることは困難であるということが明らかになった。しかし **National Trust** のボランティア活動内容の多様さ、ボランティアたちの自主性を重要視したボランティア体制、そしてボランティア参加者に対する指導と教育の手厚さなどの点は日本の高齢者ボランティア活動を広めるためにも参考にすべき点であると考えられる。

第三章では日本と比べてボランティア活動参加率の高いイギリス、アメリカのボランティアに対する考え方の違いはどこからくるのかを考察した。その結果、幼少期の経験が将来のボランティア活動参加につながる重要な役割を果たすということが明らかとなった。そこでアメリカのサービス・ラーニングという学習方法に着目し、日本にもサービス・ラーニングを取り入れることが出来るかどうかを検討した。サービス・ラーニングとは生徒の学習を目的として奉仕活動を行う学習方法である。これによって生徒たちは幼少期からボランティア活動、他者を助けるための活動を当たり前のこととして認識し、成長してからもボランティア活動をしようという意欲につながるのではないかと考えられる。しかし、アメリカと日本の学校制度の違いや学校教育でボランティア活動を取り入れることで生徒の自主性を損なってしまうなどの恐れがあることから、アメリカのサービス・ラーニングを日本に取り入れることはできないという結論に至った。だが、ボランティア活動を学習の一環として用いる点は参考にできるのではないかと考えられる。

本論文では、高齢者のボランティア活動の重要性を示し、高齢者のボランティアを発展させるためにどのような課題があるのかを考察した。その結果、**National Trust** のボランティアプログラムから高齢者に配慮したボランティア政策が参考になるということが分かった。また、大人になってもボランティア活動を続け、ボランティア活動を身近なものとして認識するには幼少期からの経験が一番重要であるという結論に至った。今後、日本の子供たちにどのようなボランティア教育を行うべきかが課題である。本論文は、高齢者ボランティア活動を発展させるため、**National Trust** のボランティア政策から日本のボランティア政策の参考とすべき点を見つけ出し、また教育という観点に着目し新たな課題を提示したことに意義がある。

1950年代のファンタジー文学 —伝統の象徴としてのカントリー・ハウス—

コース	国際文化コース
学籍番号	140264
氏名	小林 真紀
指導教員	加藤 千博

1950年代のイギリスは『床下の小人たち』(1952)、『グリーン・ノウの子どもたち』(1954)、『トムは真夜中の庭で』(1958)、『ナルニア国物語』(1950-1956)、『指輪物語』(1954-1955)など、優れたファンタジー文学が多く出版されたファンタジー黄金時代である。この時代のイギリスのファンタジー文学の特徴として、物語の舞台や始まりの場所として、当時イギリスから消えつつあった古い館、カントリー・ハウスが登場することが挙げられる。

本論文では、1950年代に出版されたイギリスのファンタジー文学に、なぜカントリー・ハウスが登場するのか、その理由を明らかにすることを主題とした。これにより1950年代ファンタジー文学に共通するテーマやメッセージを示し、作品の新たな価値を明らかにすることが本論分の目的である。そのためにまず、1950年代のファンタジー文学に影響を与えたのではないかと考えられる当時のイギリス社会の状況を論じた。そして伝統的生活や価値観の崩壊、社会構造の変化といった社会の状況が作品に反映され、カントリー・ハウスが衰退した伝統の象徴として描かれているのではないかという仮説を提示した。仮説の検証を行うために、1950年代のファンタジー文学の中で物語の舞台をカントリー・ハウスと思わしき古い館やその庭とする、メアリー・ノートンの『床下の小人たち』、ルーシー・M・ボストンの『グリーン・ノウの子どもたち』、フィリップ・ピアスの『トムは真夜中の庭で』の3作品を取り上げ、分析を行った。最後に、現地でのインタビュー結果から、カントリー・ハウスをイングランドの伝統の象徴と見なすことができるかどうか仮説の検証を行った。以上からカントリー・ハウスが1950年代のファンタジー文学の舞台として選ばれた理由を明らかにした。

第1章では、ファンタジー文学を非現実的な物事を扱いながら、それらをリアリズムの手法によって描くものであると定義した。また、ファンタジー文学はただの空想物語ではなく、現実社会で起こっている問題とその解決を描くなど現実を反映するという性質をもつため、社会が深刻な問題を抱えている時代に特に優れたファンタジー文学が生まれることになる。1950年代のイギリスでは、経済の好転や社会保障の充実により豊かさを享受しながらも、大英帝国の崩壊や労働者階級の台頭など社会構造や文化の変化が起り、伝統的価値観が崩壊しつつあったことを示した。

第2章では、1950年代のファンタジー文学にカントリー・ハウスが多く登場するのは、衰退しつつあるカントリー・ハウスを当時危機的状況にあったイングランドの伝統の象徴

と重ねて描いたからではないかという仮説を提示した。その仮説の妥当性を検証するため、カントリー・ハウスを舞台とする 1950 年代のファンタジー文学を分析し、過去や伝統との関わりについて論じた。『床下の小人たち』では、小人たちやカントリー・ハウスが辿る運命に伝統的生活や価値観の変化が描かれていることを示した。『グリーン・ノウの子どもたち』では、物語の中心となるグリーン・ノウ屋敷は当時喪失の危機にあった過去の象徴であり、主人公に癒しを与えるものとして描かれていた。『トムは真夜中の庭で』では、時が変化と喪失を引き起こす一方で、過去は思い出として生き続け孤独に慰めを与えてくれると訴えていることが明らかになった。すべての作品において明らかに当時のイギリス社会の状況が作品に反映されている。カントリー・ハウスは仮説の通り衰退しつつある伝統の象徴として舞台となり、伝統や過去の思い出が与える意味を当時の読者に伝えている可能性が高いことを示した。

第 3 章では、カントリー・ハウスを本当にイングランドの伝統や過去の象徴として見なすことができるかどうかという観点から仮説の検証を行うため、カントリー・ハウスに対するイメージを論じた。現地でインタビューを行った結果、現在ではカントリー・ハウスを訪れて過去の人々の暮らしを知ることができることから、イギリス人はカントリー・ハウスに過去というイメージを強く持っていることが分かった。また、カントリー・ハウスには貴族が生活していただけでなく、使用人として多くの労働者が必須であったことなどから、カントリー・ハウスはイングランドの伝統を象徴するものの 1 つとして捉えることができる。この背景には、エリート層を中心に「イングランドらしさ」を守ることを目指したナショナル・トラストが、カントリー・ハウスの保存に力を入れたことで、支配者階級の遺産であるカントリー・ハウスが国民的遺産に読み替えられていったことがある。このことから、カントリー・ハウスが衰退したイングランドの伝統や過去の象徴として作品の舞台となったという見方は可能である。

以上のことからカントリー・ハウスは、衰退したイングランドの伝統や過去を象徴するものとして作品の舞台となっていると結論づけることができる。3 作品には共通して、伝統の衰退や時間をもたらす変化と喪失が描かれており、大英帝国の崩壊や伝統的価値観の崩壊、社会構造の変化といった社会問題が反映されていることが分かるが、変化と喪失を嘆くのではなく、伝統的暮らしを捨てて新しい生活を始める、過去との交流により新しい自分の居場所を獲得するという前向きな物語になっている。これは大きな変化を迎えていた当時のイギリス社会に対して、変化を受け入れて現実を生き抜く力を与えるものであった。このように 1950 年代のファンタジー文学に共通するメッセージを示し、これらのファンタジー文学の新たな価値を明らかにしたことが本論分の意義である。

『レ・ミゼラブル』の変遷
—ミュージカル『レ・ミゼラブル』人気の理由—

コース	国際文化コース
学籍番号	140454
氏名	友永 純菜
指導教員	加藤 千博

ミュージカル『レ・ミゼラブル』は、1985年の初演を皮切りに現在までロンドンでロングラン公演を続ける人気作品である。そしてミュージカル『レ・ミゼラブル』は42カ国にもものぼる国で上演を成功させ、さらに英語から21カ国もの言語に翻訳されて上演されている。例えば日本では、日本語版ミュージカル『レ・ミゼラブル』が1987年6月に帝国劇場で初演を迎えてから2017年には30周年を迎えるほどのロングラン公演を記録している。世界各地でロングラン公演が続く中、2012年にミュージカル『レ・ミゼラブル』を完全映画化した作品が公開され多数の賞に選出されるなど話題となった。

ミュージカル『レ・ミゼラブル』は、原作小説を約3時間にまとめ上げた作品である。そのため英語版ミュージカルのパン1つを盗んだという罪のために19年間投獄され、このような法律を作り出した社会を憎んでいたジャン・ヴァルジャンが、愛に触れることによって更正していくという物語のあらすじは、ヴィクトル・ユゴー (Victor Hugo, 1802-1885) が著した小説 *Les Misérables* (1862) とほとんど同じである。原作小説は日本語で文庫本5冊分にも及ぶ大作小説であるが、出版当初から人気があり現在でも世界で読まれ続けている名作である。しかし大作である原作小説は複雑であり、ミュージカル作品を先に観劇した者にとって、物語とは関係のない挿話が多くとても読みづらい作品であるといえる。ミュージカル作品の魅力は物語にあり、ミュージカル製作者による物語の要約にあるのではないだろうか。

そこで原作小説と英語版ミュージカルの違いを指摘したうえで、ミュージカル『レ・ミゼラブル』が世界で人気がある理由を探究していく事を本論文の主題とする。これにより一般的に大衆向け作品であり研究対象とみなされない作品の分析を試みることを本論文の目的とする。原作小説からミュージカルへの変遷をたどると原作小説とミュージカルの相違点が明らかになりその相違点に人気の理由があるのではないかという仮定のもと、原作小説と英語版ミュージカルを考察し、ミュージカルが人気の理由を探究した。

まず第1章では、英語版ミュージカルのもととなる作品である原作小説『レ・ミゼラブル』が作られる背景として、原作小説の舞台となる19世紀フランス社会とその時代に成立した思潮であるロマン主義、そしてそのロマン主義文学を主導したユゴーの生涯と彼の思想について論じた。19世紀フランス社会は、近代市民社会が成立し最終的に共和派が勝利していくという移行期間であった。そしてその移行期間に成立したロマン主義という思潮

は、現代につながる新しい価値観を人々に提供した。ユゴーは劇作家としてだけでなく、詩人として、政治家として、社会運動家として 19 世紀フランス社会の幅広い分野で活躍していた。このようなユゴーが自身の宗教哲学を完成させ、また共和主義者として自覚した後、著した作品が原作小説『レ・ミゼラブル』であった。

続く第 2 章では原作小説『レ・ミゼラブル』の作品分析をおこなった。原作小説の執筆過程をたどりユゴーが人道主義的観点からこの物語を書き始めたが、共和主義者として自身の思想を完成させた後、原作小説に多くの加筆を加えていることを明らかにした。その加筆の部分にはユゴーの思想が大いにつめこまれており、その思想が多くつめこまれた「哲学的部分」こそ原作小説の魅力であると論じた。しかしそのユゴーの思想は現代のわたしたちの理解の範疇を超える思想であることを明らかにした。一方貧困という課題に心を動かされたユゴーは 100 名を超える登場人物によって時代に奔走された 19 世紀フランス社会を生きた民衆を表現していた。

そして第 3 章では、原作小説と比較することで英語版ミュージカルの人気の理由が明らかになるという前提のもと、英語版ミュージカルについて論じた。英語版ミュージカルの制作は原作小説からフランス語版ミュージカルを経るという経緯をたどり、英語版ミュージカルはロイヤル・シェイクスピア・カンパニーによるフランス語版ミュージカルに施された変更の結果人気になったことがわかった。そして英語版ミュージカルが具体的にどのような評価を受けているのかレビューを分析したところ高評価が多くなっており、特に英語版ミュージカルの音楽が観客を引き付けることを論じた。そして、英語版ミュージカルは原作小説と比較すると原作小説の哲学的部分が排除されており、原作小説が内包していた群像劇的側面が誇張されていることを明らかにした。劇的なストーリー展開が強調された結果それぞれの登場人物が色濃く語られることになった。そして、ユゴー自身が述べるように原作小説ではどの社会にも当てはまるような問題を扱っていた。そのどの社会にも当てはまる貧困という物語を英語版ミュージカルの主題として置いたことが英語版ミュージカルの人気の理由であると考察した。

本論文では、英語版ミュージカルの人気の理由は原作小説と英語版ミュージカルの相違点にあることを明らかにした。原作小説はユゴーのあらゆる思想が存分に詰め込まれており宗教的な観点、政治的な観点、社会的な観点などあらゆる観点から分析される作品である。一方英語版ミュージカルはユゴーの思想が存分に詰め込まれた哲学的部分が排除され、原作小説の物語に焦点が当てられた作品である。英語版ミュージカルの人気の理由は、原作小説における「哲学的部分」が排除され、代わりに音楽によって群像劇的側面が強調され貧困というテーマが主題となったからであると結論付ける。そして、一般的に大衆向けであまり研究対象とみなされないミュージカル作品『レ・ミゼラブル』を分析したことに本論文の意義を見出せる。

Oliver Twist がイギリス社会に与えたもの
—ディケンズの生涯、作品から見る階級意識—

コース	国際文化コース
学籍番号	140478
氏名	中村 さくら
指導教員	加藤 千博

世界で最も有名とされる小説家の1人であるチャールズ・ディケンズの作品の中で、映画やミュージカルなど様々な形で国民に愛される作品が *Oliver Twist* である。この作品は1834年に制定された新救貧法を題材とし、救貧院での悲惨な生活や役人の非人道性などを批判している。このようにディケンズの特徴は弱者の視点を持って社会諷刺し、下層階級の生活をリアルに描くことであるといえる。一般的にディケンズは下層階級の視点を持って *Oliver Twist* を描いたと解釈される。しかし、果たしてそのような解釈は妥当であろうか。

そこで本論文では、ディケンズはどのような視点で *Oliver Twist* を執筆したのかを主題とした。ディケンズには中産階級を優遇するような視点があるのではないかと仮定し、彼の生涯や作品を新たな視点から分析した。この研究において、ディケンズは下層階級の視点を持ったとされる従来の一般的な解釈に加え、ディケンズの中に固執した階級意識があるのではないかという新たなディケンズの側面を発見することを目的とした。

本論文では、はじめにディケンズの生い立ちについて述べ、彼の特徴として挙げられる下層階級の視点はどのように培われたのか、そして彼はどのような存在であったのかについて論じた。次に、*Oliver Twist* 執筆の背景とされる新救貧法の成立を明らかにし、*Oliver Twist* は下層階級に希望を与えた作品であるとし、どのような諷刺やストーリー構成が下層階級に寄り添い、希望を与えるのかを考察した。そして最後に一部の研究者が指摘する *Oliver Twist* の欠陥部分を分析し、その理由について作家の生涯や作品の構成などを踏まえ考察した。そしてディケンズは下層階級、中産階級、どちらの視点で *Oliver Twist* を執筆したのかを結論づけた。

第1章では、ディケンズの生涯について明らかにした。彼の生涯は輝かしかったといえるが、地位を築くまでに苦悩の幼少期があった。彼は家計を助けるべく児童労働を行い、学校には通えず十分な教育を受けることはできなかった。これが彼にとって好機となり、彼はジャーナリストとしての地位を獲得する。その後物語に興味を持ったディケンズはジャーナリストの仕事の傍ら小説家として活動の範囲を広げ、名声を得るようになった。彼の特徴である下層階級の視点には自らの幼少期の経験に加え、慈善活動家として下層階級の人々を支援していた経験が影響している。ディケンズは苦悩の幼少期を経てジャーナリストや小説家、慈善活動家など様々な面を持っているということが第1章では明らかとな

った。

第2章では、そのような生涯をたどったディケンズは下層階級の視点を持ってどのように *Oliver Twist* を描いたのか、そして作品を通じて下層階級の人々にどのような救いの手を差し伸べたのかを論じた。執筆の背景には、社会の理不尽な構造によってつくられた新救貧法に苦しめられている貧民が存在していた。ディケンズは救貧院での悲惨な生活や役人の非人道的な態度を描き、批判したのである。彼の諷刺は下層階級から共感を得るだけでなく、下層階級の人々の実際の生活より過酷な生活を作中においてリアルに描くことで下層階級の人々に安心感を与えているのである。これらは自ら貧困に苦しめられた経験をもつ彼であるからこそ描けるものであり、この点で *Oliver Twist* はディケンズが下層階級の視点をもって描いた作品であると論じた。

第3章では、一部の研究者に批判される *Oliver Twist* の欠陥部分を分析することで、欠陥部分にどのようなディケンズの意図があるのかを考察した。欠陥部分の一つ目は、物語前半では能動的な態度をとっていたが後半では受動的になってしまう主人公の行動の変化についてである。これはディケンズが読者の存在を意識してオリバーに同情を寄せられるようにあえてリアルに描かなかったためであると論じた。また当時の読者層を述べ、ディケンズが対象としている読者が中産階級であることが明らかになった。二つ目の欠陥は作品の前半と後半の繋がり弱さ、また物語後半に偶発的な要素が増えることである。物語前半に提示した社会問題に対し、ディケンズは肉親の愛情こそが貧困に苦しめられている孤児への救済法と考えたからであると考察した。大人に愛されるべき子供へと変化したオリバーは当時の中産階級の家族における子供像と一致しており、ディケンズの中産階級の視点をうかがうことができた。またディケンズの生涯と照らし合わせると、*Oliver Twist* における悪役フェイギンは彼が幼少期の頃勤めていた工場で親切にしてくれた仲間の名前であることが明らかとなった。これほどディケンズにとって幼少期の靴墨工場での労働は忘れたくない過去なのである。このような精神的痛手を負いながら、ジャーナリストとして、小説家として成功したディケンズは、中産階級としての誇りと執念を持ち続けていたといえる。そして彼は下層階級に寄り添いながらも、中産階級の視点で *Oliver Twist* を描いていたのである。

Oliver Twist を読んだとき、主人公オリバーが救貧院で粥のおかわりを求める場面に同情の気持ちを持たない読者はいないであろう。それほど *Oliver Twist* は下層階級に寄り添った希望のある作品と解釈される。しかし本論文で指摘したように、主人公の行動の変化や物語後半のストーリーの偶発性など、欠陥部分が存在していた。このような批判がある中、多数の中産階級の読者の存在や作中に中産階級の家庭における子供像を表現すること、また貧困状態に成り下がったことからうまれたディケンズの中産階級への執着などを理由に、ディケンズは中産階級の視点を持って描いたと結論づけることができた。*Oliver Twist* は下層階級に寄り添った作品であるという従来の解釈に加え、ディケンズは中産階級の視点をもって *Oliver Twist* を描いたという新たな解釈を提示することに本論文の意義がある。

ジェイン・オースティンの風景観 —ピクチャレスク美学の観点から—

コース	国際文化コース
学籍番号	140492
氏名	西迫 真央
指導教員	加藤 千博

18世紀後半のイギリスではピクチャレスク美学という一つの美的観念が生まれ、多くの人がその流行に興じた。現代でも高い人気を誇るイギリスの女流作家ジェイン・オースティンも影響を受けており、そのことは彼女の作品に「ピクチャレスク」という言葉や関連する描写が多く存在することから読み取れる。しかしピクチャレスク美学に対するオースティンの態度を巡る解釈については、研究者の間で意見が分かれている。

この研究テーマを設定する背景には、筆者がイギリスに行った際に自然や風景に対するイギリス人の強い愛着が見受けられたことがある。同様に風景への関心が強く、風景描写を多く用いるオースティンの作品との関係があるのではないかと考えたのである。

本論文ではオースティンの風景観を主題に、主にオースティンのピクチャレスク美学に対する見方を明らかにすることを目的とした。そのため本論文の第一章では、まず研究の前提となるピクチャレスク美学の成立背景や概要について説明し、本論文におけるピクチャレスク美学をギルピンの提唱する風景の鑑賞法とすることを定めた。そして先行研究に基づき、オースティンが(1)ピクチャレスク美学に対して肯定的、(2)執筆活動の過程で変化(肯定的→否定的)という二つの解釈の妥当性を検討した。そしてどちらの解釈も正当性に欠けると判断した上で、オースティンが(3)ピクチャレスク美学に対して執筆活動の初期から否定的に捉えていたとする第三の解釈を本論文の仮説として提示した。

第二章では、第一章で提示した仮説の検証を行うため、オースティンの主要作品を執筆時期によって前期三作品と後期三作品に分け、各節で詳細な作品分析を行った。まず前期三作品においては「ピクチャレスク」という言葉そのものやピクチャレスク美学に関連する描写は多く見られたものの、それらが肯定的に描かれているとは捉えにくいという判断に至った。それは、作中でピクチャレスク美学について語る登場人物の性格や社会的地位、またその発言の受け取られ方を考察した結果である。さらに後期三作品では、「ピクチャレスク」という言葉自体が消え、ピクチャレスク美学に関する描写も見られなくなった。そのかわりにイギリスのありのままの自然を称賛する描写が増え、庭園の「改良」や過度に人工的な風景に対しては嫌悪感が示されていることが分かった。これらのことからオースティンは当時流行していたピクチャレスク美学に影響を受けつつも、ピクチャレスク美学の欠点を見抜いており、作品においてその不完全性を指摘していた可能性を示した。

第三章ではオースティンがピクチャレスク美学を否定的に捉えていた場合の理由について

て考察を行った。ピクチャレスク美学は穏やかで変化の少ない風景式庭園を批判するもので、視覚的な面白さを求めるあまりありのままの自然風景からは遠のいてしまっていた。世間がそうした風景を好み、本来手を加える必要のない自然まで改良されていく中で、オースティンはこの流れに危機感を抱いていたと考えられる。そしてオースティンが作品の中で称賛するイギリス本来の風景がどのようなものであったかを明らかにするために、執筆活動の時期と照らし合わせながら彼女自身が生活を送った場所について論じた。

こうした分析や考察より、オースティンが執筆活動の初期からピクチャレスク美学を否定的に捉えていたとする解釈は可能であることが明らかになった。そして作品中で描かれる美しい風景の元になっているのは、彼女自身が幼いころから過ごしてきたスティーブントンやチョートンのように、癒しや創作意欲を与える静かなイングランド南部の田園風景であったと推察される。彼女はこれを「真のイングランドの風景」として自身の作品の中で示したかったと考えられる。

本論文では、ピクチャレスク美学を一つの主要な観点としてオースティンの風景観がどのようなものであるかを探った。彼女は当時のイギリスの風景観を積極的に作品に取り入れることで、読者の興味・関心を惹くことに成功していると言える。しかし、オースティン自身はピクチャレスク美学に賛同していたわけではなく、むしろピクチャレスク美学の流行によってもたらされた伝統的なイングランドの田園風景の消失に警鐘を鳴らしていたと考えられる。彼女が愛したのはピクチャレスク美学によって語られる風景ではなく、イギリスのありのままの田園風景であった。彼女の作品が今も変わらず愛され続ける理由には、そうしたイングランド本来の風景への強い愛着が評価されていることもあるのではないだろうか。本論文は人気作家の一人であるオースティンの風景観について、新しい見方を提示した点で意義があると言える。